

できる気象モデルが確立されれば、ここに述べたような時間依存型の短期汚染予測モデルは大いに力を発揮できるであろう。しかしまた、現状においても、与えられた条件下での種々の汚染質のふるまいを知るうえで現モデルの利用範囲は広いと思われる。

文 献

岡本真一, 塩沢清茂, 1977: 拡散モデルと大気汚染シミュレーション, 天気, 24, 2~25.

環境庁, 1975: 総量規制マニュアル, 公害研究対策センター.

機械振興協会, 1977: 大気汚染予測制御システム (APMS) 開発報告書.

浦生 稔, 森 俊秀, 横山長之, 1976: 逆転層底部高度の日変化観測, 公害, 11, 231~246.

横山長之, 北林興二, 足立芳寛, 1975: 環境アセスメント手法入門, オーム社.

吉門 洋, 1976: 鹿島灘系海風の構造, 天気, 23, 88~93.

==== 支部だより ==== 昭和52年度 日本気象学会 九州支部 講演会 開催

九州支部

昭和52年度の日本気象学会九州支部講演会を、2月8日、福岡管区気象台で開催した。この会は、昨年度から気象台の研究会とは独立に開催しており、今年は2年目で、ようやく定着してきた感じであった。すなわち、参加者は地元九州大学、福岡大学、気象台関係その他の学会員約70名に及び、その中10名ほどは初参加という会員であった。

講演題目および発表者は次のとおりである。

1. 対馬海峡を通過する寒冷前線の雨について
—対馬海峡での熱の供給について—
前田 宏 (厳原測候所)
2. 地上風の収束発散と強雨域について
平野 博 (福岡管区気象台)
3. 下層の風向を利用した宮崎県の雨量予想について
笠村 幸男 (宮崎地方気象台)
4. 絹笠山 (雲仙) の風と短時間雨量
堤 良造 (福岡管区気象台)
5. 長崎原爆当日の気象
田畑 七郎 (長崎海洋気象台)
6. 地震発生前後における地中温度の変化
付: 地震なまぎの由来に対する一考察と筑紫の石城について
真鍋 大覚 (九州大学工学部)
志賀 正信 (長崎海洋気象台)
7. 黄砂発現の周期
真鍋 大覚, 佐藤 洋子
(九州大学工学部)
荒生 公雄 (長崎大学工学部)
8. 山越え気流の数値実験

- 大場 良二 (三菱重工長崎研究所)
9. 海陸風——局所加熱の影響
大河内康正 (九州大学理学部)
10. アメダスとレーダエコーからみた九州地方の降雨特性
黒木 義秋, 渡辺 勉
(福岡管区気象台)
11. 海洋の大気太陰潮汐への影響
上野 充, 澤田 龍吉
(九州大学理学部)
12. 最大混合層高度と汚染濃度との関係
早川 誠而, 坂上 務, 元田雄二郎
(九州大学農学部)
13. 嘉万ポリエの霧について
前田 時博 (大嶺中学校)
14. 夏から初秋の気温予想法に対する総観的考察
山鹿 延 (福岡管区気象台)
15. 傾圧不安定の一側面
瓜生 道也 (九州大学理学部)
16. 回転水槽中の傾圧不安定波
守田 治, 細川 善弘, 河喜多益子
(九州大学理学部)
17. 進行波による二次流れ
久保 光則 (九州大学理学部)
18. 降雨機構の違いがレーダ反射強度におよぼす影響について
早川 誠而, 坂上 務, 元田雄二郎
(九州大学農学部)